

世間恩を知りて恩に報ゆるは佛に過ぎたるなきが故に」と

蓋し之れ佛一代の御活動は報恩に終始して居るを言ふたものであらう、一切の報恩の行は即ち之れ佛作佛行である、佛一代の願行は四弘誓願と其の實行にあつた、而して其は悉く報恩であると言ふ所に何んと吾等の胸奥に有難い光明を投げ込まるとではないか。信仰即生活の眞意義は確かにこゝに存すること自分は深く感ずるのである。

そこには「共生極樂成佛土」のために特別な修行の方法があるわけで無い、吾等の日々の營み、そは商業であらうが、工業であらうが、政務であらうが、農業であらうが、何等の差異も存在しない、そが悉皆成佛の理想國土を顯現するの聖行である事を自覺し「願以此功德平等施一切」と廻向する時、是こそ眞に生活即信仰ではないか。(終)

阿含物語 (二)

梅村舜道

是の如きを我れ聞き、一時佛舎衛國の祇樹花林窟に在して大比衆千二百五十人と俱なりき。時に諸の比丘乞食の後に於て花林堂に集り、各共に議して言はく、諸の賢比丘よ、唯無上尊を最も奇特と爲す、神通遠く達し、威力弘大にして乃ち過去無數の諸佛涅槃に入り玉ひ、諸の結使を斷じ、戲論を消滅し玉ふを知り玉ふ。又彼の佛の劫數の多少、名號、姓字、生るゝ所の種族、其の飲食する所、壽命の脩短、更る所の苦樂を知り玉ふ。又彼の佛に如是の戒あり、如是の法あり、如是の慧あり、如是の解あり、如是の住ありと云ふことを知り玉ふ。云何が諸賢よ、如來は善別法性たるを以て是の如きことを知り玉ふ。諸天來りて語るが爲めに乃ち此の事を知り玉ふ。爾時世尊閑靜の處に在して、天耳清淨にして、諸の比丘の是の如き議を作すを聞き玉ひ、即ち座より起ちて花林堂に詣りて座に就きて坐し玉ふ。爾の時世尊知りて而も故らに問ひ玉ふ。諸の比丘に謂はく、汝等此に集りて何事をか協議するや。時に諸の比丘具に事を以て答ふ。爾時世尊諸の比丘に告げ玉はく、善い哉善い哉、汝等平常信を以て出家修道せむに、諸の所應の行凡そ二あり、一に曰く賢聖講法。二に曰はく賢聖默然なり。汝等の論する所正に是の如くなるべし、如來神通威力弘大にして盡く過去無數劫の事、善く法性を解し玉ふを以ての故に知り玉ふ、亦諸天來りて語るが故に知り玉ふと。佛時に頌して曰はく

比丘法堂に集り

賢聖の論を講説す

如來靜堂に處して

天耳をもつて悉く聞知せり

佛日光り普く照らして

法界の義を分別す

亦知る過去の事

三佛の般泥洹

名號と姓種族と

受生の分亦知れり

彼の處所に隨つて

淨眼をもつて皆之を記せり

諸天の大威力

容貌甚だ端嚴なる

亦來りて我に啓告す

三佛の般泥洹と

生と名號と姓の記と

哀戀の音盡く知れるを

無上天人尊は

過去佛を記す

又諸の比丘に告げ玉はく汝等如來の識宿命智過去の諸佛の因縁を知るを聞かんと欲するや不や我當に之を説くべしと諸の比丘白して言はく世尊よ今正に是時なり願樂して聞きたてまつらむと欲す善い哉世尊時を以て講説し玉へ當に之を奉行すべし佛諸の比丘に告げたまはく諦聽せよ諦聽せよ善く之を思念せよ我當に汝が爲めに分別し解説せむ時に諸の比丘教を受けて聽く佛諸の比丘に告げたまはく過

去九十一劫、時に世に佛あり、毗婆尸如來至眞と名づく、世に出現したまへり。復次に比丘、過去三十一劫、佛あり、尸棄如來至眞と名づく、世に出現し玉へり。復次に比丘、此の三十一劫中に佛あり、毗舍婆如來至眞と名づく、世に出現し玉へり。復次に比丘、此の賢劫中に佛あり、拘樓孫と名づけ、又、拘那含と名づけ、又、迦葉と名づく、我今亦賢劫中に於て最正覺を成す。佛時に頌して曰はく

過ぐる九十一劫

毗婆尸佛あり

次の三十一劫

佛あり尸棄と名づく

即ち彼の劫中に於て

毗舍如來出で玉ふ

今此の賢劫中

無數那維歲

四大仙人あり

衆生を愍むが故に出づ

拘樓孫と那含と

迦葉と釋迦文と

汝等當に知るべし、毗婆尸佛の時人壽八萬歲なり。尸棄佛の時人壽七萬歲なり。毗舍婆佛人壽六萬歲なり。拘樓孫佛の時人壽四萬歲なり。拘那含佛の時人壽三萬歲なり。迦葉佛の時人壽二萬歲なり。我今世に出づるに人壽百歲にして少しは出づるものあるもその多くは減せり。佛時に頌して曰はく

毗婆尸の時の人 壽は八萬四千

尸棄佛の時の人 壽は七萬歲

毗舍婆の時の人 壽命六萬歲

拘樓孫の時の人 壽命四萬歲

拘那含の時の人 壽命三萬歲

迦葉佛の時の人 壽命二萬歲

我が今の時の人の如き壽命百を過ぎず

毗婆尸佛は刹利種に出づ。姓は拘利若なり。尸棄佛、毗舍婆佛の種姓も亦爾なり。拘樓孫佛は婆羅門種姓迦葉に出づ。拘那含佛、迦葉佛種姓亦爾なり。我今如來至眞刹利種に出で、名づけて瞿曇と曰ふ。佛時に頌して曰はく

毗婆尸如來と 尸棄と毗舍婆と

此の三の等正覺は 拘利若姓に出づ

自餘の三如來は 迦葉姓に出づ

我今無上の尊 諸の衆生を導御す

天人中の第一なり 勇猛にして姓は瞿曇

前の三の等正覺は

刹利種に出づ

其の後の三如來は

婆羅門種に出でたり

我今無上尊

勇猛にして刹利に出づ

今私に曰。此の一片に依りて、釋尊に過去先佛の説ありしことを信すべき也。過去

(長阿第二)

先佛の説あることを信する者は、過去久遠無量不可説の時に於て無量の佛陀の出現ありしことを聞きて、散て驚駭して、抱惑自迷すべきにあらざる也。過去無限の時間に於て無量の佛陀の出現を信する者は、亦將來無限の時間に於て無量の佛陀の出世あること類推すべき也。蓋し此れ過現未の三際を貫く無限の時間上に於て豎に考ふべき佛陀世尊三界出興の儀にして、散て疑惑すべきことにあらざるなり、應知。

二

我聞けり是の如きを。一時佛舍衛國に遊んで勝林給孤獨園に在せり。爾の時に世尊諸の比丘に告げたまはく。若し比丘ありて七法を成就すれば、便ち賢聖に於て歡喜樂を得て、正しく漏盡に趣く。云何が七と爲すか。謂はく比丘知法・知義・知時・知節・知己・知衆知人勝如なり。云何比丘の知法と爲すや。謂はく比丘正經歌詠・記説・偈吽・因緣撰錄本

起此說生處を知りて、廣く未曾有の法を解し、及び是の義を説く、是を謂ふて比丘の知法と爲す也。若し比丘ありて法を知らず、謂はく正經・歌詠・記說・偈・因緣撰錄・本起此說生處廣解未曾有の法及び說義を知らずんば、是の如きの比丘を不知法と爲す。若し比丘ありて善く法を知るとは、謂はく正經・歌詠・記說・偈・因緣撰錄・本起此說生處廣解未曾有法及び說義を知る。是を比丘の善知法と謂ふなり。云何が比丘の知義と爲すか。謂はく比丘、彼彼の說義・是彼義・是此義を知る、是を謂ふて比丘の知義と爲す也。若し比丘ありて義を知らずんば、謂はく彼彼說義、是彼義、是此義を知らず、是の如き比丘を不知義と爲すなり。若し比丘ありて善く義を知るとは、謂はく彼彼の說義、是彼義、是此義を知る、是を比丘の善知義と謂ふ也。云何が比丘の善知時と爲すや。謂はく比丘ありて此の時は修下相、是時は修高相、是時は修捨相なるを知る、是を謂ふて比丘の知時と爲す也。若し比丘ありて時を知らずんば、謂はく是時修下相、是時修高相、是時修捨相を知らず、是の如きの比丘を不知時と爲す也。若し比丘ありて善く時を知るとは、謂はく是時修下相、是時修高相、是時修捨相なるを知る、是を比丘の善知時と謂ふ也。云何が比丘の知節と爲すか。謂はく比丘の知節とは、若しは飲若しは食、若しは去、若しは住、若しは坐、若しは臥、若しは語、若しは默、若し大小便にも、睡眠を捐除して正智を修行す、是

を比丘の知節と爲す也。若し比丘ありて節を知らずとは謂はく、若飲若食若住若坐若臥若語若默若大小便捐除睡眠修行正智を知らず、是の如き比丘を不知節と爲す也。若し比丘ありて善く節を知るとは謂はく、若飲若食若去若住若坐若默若大小便捐除睡眠修行正智を知る、是を比丘の善知節と謂ふ也。云何が比丘の知己と爲すか、謂はく、比丘自ら我に爾所の信戒聞施慧辯阿含及び所得あることを知る、是を謂ふて比丘の知己と爲す也。若し比丘ありて己を知らずとは、謂はく、自ら我に爾所の信戒聞施慧辯阿含及び所得有るを知らず、是の如き比丘を己を知らずと爲す。若し比丘ありて善く己を知るとは、謂はく、自ら我に爾所の信戒聞施慧辯阿含及び所得有るを知る、是くの如きの比丘を善く己を知ると爲す也。云何が比丘の知衆と爲すか、謂はく、比丘是の刹利衆、此の梵士衆、此の居士衆、此の沙門衆を知り、我れ彼の衆に於て、應に是の如く去り、是くの如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く黙するを知る、是を謂ふて比丘の知衆と爲す也。若し比丘ありて衆を知らずとは、謂はく、此の刹利種、此の梵士衆、此の居士衆、此の沙門衆を知らず、我れ彼に於て應に是の如く去り、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く黙するを知らず、是の如き比丘を不知衆と爲す也。若し比丘ありて善く衆を知るとは、謂はく、此の刹利衆、此の梵士衆、此の沙門衆を知り、我れ彼に於

て應に是の如く去り、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く黙するを知る、此を比丘の善知衆と謂ふ也。云何が比丘の知人勝如なる謂はく、比丘二種の人有るを知るなり、信有ると、不信有るとなり。若し信あるものは勝れ、不信なる者は不如と爲す也。謂はく、信者に復二種あり、數々比丘を往見するあり、數々比丘を往見せざるあり。若し數々比丘を往見する者は勝れ、若し數々比丘を往見せざる者は不如と爲す也。謂はく、數々比丘を往見する者に復二種あり、比丘を禮敬する者あり、禮敬せざる者あり。若し比丘を禮敬する者は勝れ、若し比丘を禮敬せざる者は不如と爲す也。謂はく、比丘を禮敬する者に復二種あり、經を問ふ者あり、經を問はざる者あり、若し經を問ふ者は勝れ、經を問はざるものは不如と爲す也。謂はく、經を問ふ者に復二種あり、一心に經を聽く者あり、一心に經を聽かざる者あり、若し一心に經を聽く者は勝れ、一心に經を聽かざる者は不如と爲す也。謂はく、法を聞持する人に復二種あり、法を聞きて義を觀する者あり、法を聞きて義を觀せざる者あり、若し法を聞きて義を觀する者は勝れ、法を聞きて義を觀せざる者は不如と爲す也。謂はく、聞法觀義の人に復二種あり、法を知り義を知り、法に向ひ、法に次ぎ法に隨順して、如法に之を行する有り。法を知らず、義を知らず、法に向はず、法に次がず、法に隨順せず、如法に行せざるものあり。若し知法、知義、向

法次法にして法に隨順して如法に行する者は勝れ。不如法不知義不向法次法不隨順法不如法行の者は不如となす也。謂はく、知法知義向法次法隨順於法如法行の者に復二種あり。自らを饒益し、亦他を饒益し、多人を饒益し、世間を慳傷し、天の爲めに人の爲めに義を求め、及び饒益し、安穩快樂を求むるもの有り。自らを饒益せず、亦他を饒益せず、多人を饒益せず、世間を慳傷せず、天の爲めに、人の爲めに義を求め、及び饒益し、安穩快樂を求めざる者あり。若し自饒益亦饒益他饒益多人慳傷世間爲天爲人求義及饒益求安穩快樂の者は此の人は彼の人中に於て極第一と爲し、大と爲し、上と爲す、最と爲し、勝と爲し、尊と爲し、妙と爲すなり。譬へば、牛に因りて、乳有り。乳に因りて、酪あり。酪に因り、生酥あり。生酥に因りて、熟酥あり。熟酥に因りて、酥精あり。酥精は彼の中に於て極第一と爲し、大と爲し、上と爲し、最と爲し、勝と爲し、尊と爲し、妙と爲す也。是の如く、若し人自ら饒益し、亦他を饒益し、多人を饒益し、世間を慳傷し、天の爲めにし、人の爲めにし、義を求め、及び饒益し、安穩快樂を求む。此の二人上の所説の如く、上の分別の如く、上の施設の如し。此を第一と爲し、大と爲し、上と爲す、最と爲し、勝と爲し、尊と爲し、妙と爲す、是を比丘の知人勝如と爲す也。佛の説は是の如し。彼の諸の比丘佛の説きたもふ所を聞きて、歡喜して奉行しき。

今私に曰。阿含を強ちに小乗と貶し、

(中阿含第一善法經)

羅漢を直ちに自調孤度と思ふは甚だ謬れり。佛

一切の人天を勸めて、自他の共饒益の人を稱して人中の極第一と爲して所讚極ま

れり、即ち大人の大乗を讚し玉ふ也。此の一切世間有信の人の上に得道の羅漢比丘

あり、得道の比丘の上に佛陀世尊あり、佛説の深廣推して知るべき也。況や乳酪生酥

の説は天台五時の判教と符節を合するが如し、智者の説或は其の源を茲に汲みし

に非らざる歟。